

---

kiseki

ゆきうさぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

k i s e k i

### 【Nコード】

N 2 7 6 4 D

### 【作者名】

ゆきつとぎ

### 【あらすじ】

もしかして、奇跡ってホントにあるのかも。誰にでも起こりうるのかもしれない奇跡。

40歳・小5の娘のママ・シングル歴10年。

これが簡単な私の自己紹介。

世間一般に言うところのおばさん」なのかも知れない。

でも、こんな私にも10代、20代の頃のような、イヤ今までに感じた事のない

キモチとそして、奇跡が起こった2007年の夏。

その人と出会ったのは、一昨年の秋。

初めて会った瞬間に今までの人生で感じた事のない「なにか」を感じた。

よく“頭の中で鐘が鳴った”とか“電気が走るような”とか聞くけどそのどれとも違う。

なぜかわからないけど「この人だ」と思った。

実は私はバツイチならぬ、バツ2。

2回も結婚していてなんだが、こんな感覚は人生初・だった。

言い訳じゃないけど、1回目は本当に好きで結婚したけど、2回目は事情があり仕方なくだったから。

1回目の相手はとつても優しく、家事も手伝ってくれる人だったが金銭面にルーズであちこちに借金を作られ、毎日のように信販会社からの催促の電話があった。

結婚後、信販会社6社に借金があるのがわかったのだった。

私がかやくりして返済しても次々に新しい借金を増やす。

私の財布からいつの間にかキャッシュカードを抜き勝手に口座からお金を下ろしたり

生活費も抜き取られたりして、封筒に入れた生活費をタンスの引き出しの裏に隠しながら生活をしていた。

給料が手取りで25万。

そのうち返済分が13万だった。

私も家計の為、パートしていたけど、とてもじゃないが追い付かない。

好きだけど、優しいけどこれじゃ生活できない。

それに、大の酒好きで仕事帰りはもちろんの事、休日には朝から焼酎を呑んで

いるような人だった。

泥酔して帰り、玄関先で寝てしまう事もしょっちゅう。

体の為にもお酒を減らすよう説得したが言う事を聞かない。

何ヶ月も悩んだ末、離婚を選んだ。

別れた後、私の身内にも借金をしていた事がわかった。

風の噂で今は奥さん、子供と幸せに暮らしているらしい。

私と別れた事が結果、良かったのだからそれでいいと思う。

借金グセって直らないって聞くからそれはちよつと心配でもあった。

2回目の事情とは、察する通り「できちゃった」から。

1回目の彼を忘れる為に言い寄って来た好きでもない男と付き合いってしまった。

自業自得。

高校からの付き合いの歯に絹着せぬ物言いの友達には「妊娠するっ

て事は嫌いな男でもやる事、やってんじゃん」と言われ、又別の友達からは「そんな子、絶対愛せないから産まない方がいい」とも言われた。

そう思われても仕方ないけど、夫婦だからってHが必ずしも同意の上って訳じゃない。

些細な事ですぐ頭に血が上り、暴れたり「別れるなら殺す」と包丁を突きつけられたりって事が何度もあり、部屋の壁は穴だらけ。

束縛も酷くて、スカートやブイネックやノースリーブの服は露出度が高いとかで全て捨てられたしりた。

妊娠が分かって、産科の先生に「筋腫の小さいのがあるから、普通の人よりムリしないでね」と言われたが「妊娠は病気じゃねーんだ」となにも手伝ってくれなかった。

私は半分ヤケで、これで流産したらどれだけヤツは私にも周りにも責められるだろう・・・

と考えダブルの布団を干したりお風呂掃除もなんでもやってやった。掃除機さえ気をつけるよう言われていたのに。

完全にヤツにたいする当て付けだった。

そんな男だから、Hだって断ればどんな事になるか想像付くだろう・・・

結局それで産まれた子が今いるのだから、良かったのかも知れないけれど。

この子はあるなヤツの子じゃない。

私が一人でつくって産んで育てたってずーっと思いつながら日々成長を見てきた。

妊娠する前からずっと別れたいと言い続け、その度に暴れ、暴言を吐かれ続け、

また翌日から好きでもない男の食事をつくる虚しさを抱えながら生活して来た私は

「子供なんていらねーよ！訳わかんねえし」と言われ内心「やった！別れられる」と思った。

ヤツにとつて結婚も子供もただのファッションにしか過ぎず、一通り経験したらもう用無しなのである。

でもなかなか離婚届けに判を押さず、わざと「子供はやんねーぞ」と私が子供を抱っこしていると取り上げたりする。

ファッションとしか見ていないので、子供の面倒なんて見る訳が無い。

お風呂に入れたのも最初の数回。

さつさと寝入ってしまい、仕方なく私がバスタオル一枚で子供をお風呂から出し着替えを

済ませ、お茶を与え寝かし付けてから起きないか気を配りながら改めてお風呂に入る。

子供の事を優先させると「誰のおかげでメシが食える！俺の事を優先しろ」と

怒鳴り付けるくらいなのだから、子供を渡さないなんて気は毛頭なくただ単に私を困らせたいだけなのだ。

「子供なんて・・・」と言われた時「じゃ、なんで産んでくれって言っただの」と聞くと

「自分の子供ってどんなか見てみたかった。」と言った。

結婚も子供も未知の世界でちょっと興味があっただけ。だと。

そんなんであんな痛い思いをして産むこっちはたまったもんじゃない。

そして、産んだ後は一切の世話しなきゃいけない。

でも、世話をし過ぎても「俺を優先させろ」と言われるのだ。

どう？こんな男。

一緒に居たいなんて思える？  
そんな人が居るなら会ってみたい。

私は一日も早く離婚届けが欲しかった。

そうこうするうち、好きな女ができたようでやっと「別れてやる。  
でも養育費なんて

渡さねーよ」と。

これでやつと自由になれる。と本気で嬉しかった。

二度と会わなくて済むなら養育費なんていらない。

私の働いたお金でこの子を育てる。と決心した。

別れた後すぐに私の妹の友達に「誰か女、紹介して」とケータイ番号を渡したって聞いた。

全くどんだけしょうもない男なんだか・・・

呆れてもの言えない。

こんなヤツでもとつくに再婚し、子供もいるらしい。

こういう子供つくる資格ないヤツに限ってすぐできちゃうんだな。

今の奥さんの事を物好きに・・・と思ったのは一瞬で“私と同じ思いをしてなければいいな”

と思い直したのだった。

離婚した時、娘は一歳前。その娘がもう5年生。

「ね、ママ今年はサンタさんにwii頼むんだ」と、サンタなんて実在しないのを知っていながらわざと私にwiiを買わせようとするこじやくな真似をするまでに成長した。

「サンタさんにきゅうりもらうー」と言ってた3歳の頃が懐かしい。  
wiiはさすがに厳しい・・・困ったもんだ。

見かけは派手に見られ、バブルの時期にはアッシー、メッシーが居て当たり前と思われていた

私だが、実はそんなモンは一人も居なく好きになっただけで離婚してからもお付き合いしたのはたったの2人だった。

やっぱり、子持ちの恋愛は子供目線でも相手を見るので難しい。

今時の保育園には、母子家庭の子が何人も居て、皆、子供が小学校に上がる頃を目処に

入籍していた。

私も当時、3年程お付き合いしていた相手はいたがこの先、何十年と一緒に生活するには

子供の事で不安要素があつて容易に入籍する気にはなれず、別れてしまったのだった。

せつかく・・・と言つては変だが一歳前に離婚して父親の顔なんて覚えてない娘にとっては

初の“お別れ”になつてしまい、泣かれてしまった。

このときは本当に胸が痛かった。

その後はしばらく何度も電話が来て復縁したいと言われたが、1回ダメになつたものは

ムリだと話し断っていた。

別れるのは気力体力共に使うので疲れる。

私は、なんだか男の必要性を感じず、誰ともお付き合いしないまま4年が経った。

流石に保育園の頃からのママ友も心配し、今度会わせたい人が居ると言ってきたが私は

すでに男なんて面倒だと感じる域に達しており、何度となく誘いを断っていた。



何度目かの誘いで「1回だけでいいから。相手は乗り気だしイヤなら断っていいから」と

言うので、二人じゃなければ・・・と会う事にした。

年齢は私の二つ上で同年代・バツイチの子ナシらしい。

当時、まだ30代だった私は40代の男になんて興味はなく、むしろ「おやぢじゃん」と

思っていた。

30代後半の女がなにをおがましいと思われるかも知れないが、昔からなぜか私は

年上に縁がなく、寄って来るのは年下ばかり。

16歳の頃、初めて付き合ったのも一つしたの男子だった。

今思えば、中学生・・・なんて事をしたのかと苦笑いしてしまう。

結局このトシまで年上は二人しかいない。

友達にはよく年下キラーなんて金持ちのおばちゃんのような扱いを受けたが、年上は

寄ってこないのだから仕方ない。

自分から寄っていく性格じゃないし・・・

池袋のバリ風居酒屋で待ち合わせをし、一足先に着いた私達は個室に入ってまだ見ぬ“その人”の事をコソコソと話していた。

10程経った頃、“その人”は現れた。

証券マンでグレーのスーツを着ていた。

第一印象は「つまんなそうだな」だった。

全く好みではないし、なにしろこんな真面目そうな人とは付き合った事がない。

その場合は、当たり前障りのない会話でお酒を飲みお開きとなった。

翌日、お決まりだが“その人”からお誘いのメールがあり迷ったが

「もうトシもトシだし

好きななんてキモチより経済力よ！」と常日頃から同じシングルママの年上の友達に教育？

を受けていたので「若い頃みたいなキモチにはなれないし、そんなもんか」

「なにより、子供とのこの先の生活を考えなきゃ」と思いお付き合いしてみる事にしたのだった。

でも、元々そういう計算づくな付き合いができない私にはムリがあり、なにより金持ちは自分勝手だ。と言う事を知ってしまった。

金持ちなんかと付き合った事ないし、逆に私が財布を持っていないと安心してデートできないような相手が多かったから、本当の金持ちとはどんなお付き合いなのか知らなかった。

もちろん、性格によってだと思うから世間の金持ちが全員、自分勝手な訳じゃないと思う。

“その人”は所々でヤツを思い起こさせるような人だった。

「今までこんないいもん食わせてくれる男いなかったんだろう？」

「俺と出会えてよかったな」と常に上位に立っていた人だった。

それにヤケに恋愛に冷めていて、週末に会うようになっていたが翌日の仕事の事を考えて

20時には帰る人だった。

高校生だってそんな時間には帰らない。

毎回昼に新宿で待ち合わせ、ランチしてホテル直行。

夕方出て食事して20時には駅のホテルにいる。この繰り返し。

思えば、初対面からそんな「俺様」ぶりがあったと思う。

仕事後の待ち合わせだったし最初に「お疲れ様です」と声を掛けたのは私だったけど、その時

も返事すら返さなかったし。

半年付き合っただけで彼の車でお出かけしたのはたった一回。  
それで私が満足していると思っただけなのがイタイ。

大人の恋愛なんてこんなモンなのか・・・と半ば諦めつまらない日々を送っていたが

結局、会って意味を見出せず半年で破局。

「こんなに良くしてやったのに俺がなにをしたんだ」と最後までわかっていなかった。

別れてから何度かメールして来てたけど、やっぱり「俺様」はイヤだし考え直す気にはなれなかった。

男ナシの生活に戻って3ヶ月。

4年も男を必要と思わなかった私が、なんだか仕事と子育てのみの生活に物足りなさを感じていた。

やっぱり、女って弱いんだ・・・と感じた。

疲れた時に寄りかけられる相手が居たら・・・

たまには母より女を優先できる相手が居たら・・・  
と考えるようになっていた。

「出会い系」

かなり抵抗はあったが、暇つぶしにメールできる相手がいればいいな。とほんの興味本位で登録してみる。

するとすぐにメールの嵐で一日に30通を超えるメールが飛び込んで来た。

もちろん自動送信もあったが、“年齢も子持ちだって事も一切正直に書いたのに”と

感心する反面、その内容はほとんどが既婚者からの火遊びであり“

所詮、遊び相手としか思われななんだ”と落胆もした。

数日した頃、来るメールも相変わらず既婚者の火遊び目的と変態ばかりで登録した事を後悔していた。

やめる前に1回位こつちからメールしてみようか・・・と相手を検索してみた。

ふと、目に飛び込んで来たメッセージ。

それまでのヤケに“愛車はBMWです”とか“金銭面に不自由させません”なんてカネにももの言わせるようないやらしいものではなく、本当にシンプルなもの。

「なかなか将来に繋がる出会いがありません。よければメールください」って感じだったと思う。

なんだか素直な印象を受けメールしてみることにした。

数時間後、返信が来てそれからは日に何度もメールのやりとりをするようになっていた。

お互いの写真も何度か交換し、だいたいの雰囲気もわかったし、子供の運動会の日は

「楽しそうですね。ムービー送って雰囲気を俺にも分けてくださいね」と子供の事もきちんと気にかけてくれる彼に好感を持った。

メール交換して一週間後たまたまその日は金曜日であり、子供が実家に泊まる日だった。

私と彼の住まいは車で1時間半程の距離があったが、彼はこちらまで来てくれると言う。

“どんな人・・・” “少なくとも性格は合うはず”と何年ぶりにワクワクドキドキ。

メールが鳴った。

もどかしいキモチでチェックする。

すると「仕事が大引いて遅くなりそう」と言う内容。

がっかりしたが、仕方ないので「じゃあ、また次回にしましょう。

逢って話したかったけど」と返信する。

すぐに「待つて貰えるなら会いに行きます！俺もちゃんと逢って話したい」

予定よりかなり遅くなり、予約していた店をキャンセルし自宅で待つ。

10時過ぎ「近くまで来た」とメールが来たので近所のコンビニまで向かう。

しばらくどうしていいのか分からず読みたくもない雑誌を立ち読みなんかしていた。

「着きました！」とメールが来て緊張もMAX。

そーっと外に出ると、丁度店内に入ろうとする彼とバッタリ。すぐに分かった。

彼も「あ・・！」と小さく呟きニツコリと満面の笑みを浮かべてくれた。

その瞬間こそ私が「この人！」と感じた瞬間だった。

写真なんかよりずっとずっといい！

優しそうなその笑顔に一瞬にして恋に落ちてしまったのだった。

私は自分で言うのもなんだが、32歳位に見られる事が多い。

彼は私より二つ年上だが、35〜36歳位に見えた。

笑顔が爽やかで、がっしりとしたガテン系。

この私が一目ぼれなんてありえない事なのに・・・

「雨、降って来ちゃったねえ」なせか一言目に発したのがこの言葉。なにを言っているのかかわからず、だからって「はじめまして」なんていかにもそれっぽいから言いたくなかったのだと思う。

それから近くの居酒屋で2時間程過ごし、彼は仕事柄朝が早いし帰るのにまた1時間以上かかるので店を出る事にした。

席を立とうとした時に彼は決心したように顔を上げ「・・・また、来てもいいですか？」

と言ってくれた。

嬉しくて嬉しくて「また来てください！」と返事した。すると、またあの笑顔で微笑んでくれた。

自宅前まで送ってくれ、車を降りると彼の車は走って行った。

見えなくなるまで見送ろうと立っていると、曲がり角で一旦止まり躊躇している。

バックして来たので走り寄り

「あ、帰り道教えてなかったね。その角を左で国道の信号だから」と案内しました

「じゃあね。気をつけて」と見送った。

すると、また・・・バックして来る。

今度はなんだろう？

と思い近づくと「ちょっと一周しよう。乗って」と車のドアを開けて来た。

ほんの数分。夜中だから車も居なくてすぐに自宅前に戻って来てしまった。

「またね・・・」と車を降り彼の車は今度は止まる事なく、曲がり角を左折して消えて行った。

私は今にも飛び上がりたい程の気持ちを抑えながら部屋に戻る。

するとすぐに彼からメールが。

「いっぱいいっぱい逢いに来ます。逢う前からキモチはあつたけど実際に逢って話してもっと好きになったよ。帰るのが惜しい想いだつたな」

どう説明すればいいのかわからない程、その時の私は舞い上がっていた。

若い頃の、ただ純粹に人を好きになったキモチ。

そんな感覚がまだ、私にも残っていたなんて・・・自分で自分からなかった。

それから週末と一緒に過ごし、何年も一人で過ごした誕生日も一緒にいる事ができた。

彼は指輪をプレゼントしてくれて、決して高価なものではないけど本当に嬉しかった。

いつも「今の夢は　ちゃん（私）と　（娘）と一緒に遊びに行く事なんだよ」と  
言ってくれる。

「今までの感覚となにか違う。きっと幸せになれるって思える」と彼も私と同じ気持ちで居てくれていた。

お互いにバツ同士。

お互い痛みを知っているから思いやれる。

バツ同士じゃなきゃわからない事もいっぱいある。

彼は真っ直ぐに「好きだよ、愛してる。逢いたい」とキモチをぶつけてくれ、夜中に逢いに来てくれたりもした。

もちろん娘が寝ているので、駐車場ではんの30分話すだけ。

それだけの為に翌日5時前に起きなきゃいけないのに来てくれた。

そういえば例の証券マンと同じ年。  
こんなにも違うなんて。と改めて感じた。

一カ月後、彼の田舎お父さんが具合が悪いとの事で急に実家に帰ると連絡が来た。

飛行機で二時間の距離がある。

普段、会えないんだしいっぱい親孝行してきてね。と送り出した。  
寂しかったけど、心は繋がっていると確信があったからガマンできた。

2週間経った頃、容態が回復に向かっているからと彼が帰って来た。

その日は空港からまっすぐに私の元に来てくれた。

それから1ヶ月程、急な仕事で逢えなくなった事が何度もあったが、普段と変わらない生活だっただろうか。

あくる日また「田舎に行ってくる。」とメールが来て少々の不安を覚えた。

お父さんの容態が急変し、危篤状態で意識がない・・・と。

そんな状態で頻繁にメールする事もできないし、私はただ連絡を待つしかなかった。

結局、一緒に年越しはできなかった。

年明け、お父さんの意識が戻った。との事で一旦彼は帰って来る事になったが

退院しても介護が必要になるからその手続きをしないとならないようにですぐに

とんぼ返りした。

彼の急な仕事で逢えない事も頻繁にあったし、なんだか見えないなにかに妨げられているような気がした。



もしかして、一緒に居てはいけない運命なのかも・・・と。  
それが1月半ばの事。

その何日後からメールをしても一向に返信が来ない。  
不安は募りつい「なんで返事くれないの？私の事イヤになったなら  
そう言うて！」

と今思えば思いやりのかけらもないメールを送っていた。

でも、その時の私はなにも考えられずただただ、不安だった。

離婚してから今まで女より母を優先し男の事で娘に悲しい顔なんて  
見せられない。と

常に一線引いた付き合いしかできなかった私が、こんなにも素直に  
人を好きになれたのに  
その人と連絡が途絶えてしまった不安。

どうする事もできず、毎日暗闇を彷徨っている気分を決して娘や親  
には悟られないように  
するのが精一杯だった。

2月になって新しくできたリサイクルショップに何気なく出かけた  
時、思いもかけず彼からのメールが来た！

お父さんが亡くなり気持ちが悪く落ち込んでいた。と。

私はなんて自分勝手なメールを送り付けていたのだろうかと自己嫌  
悪に陥った。

一人残されたお母さんの問題があるから、なるべく早く良い方法を  
見つけて帰るから。と。

また、私はいつになるか分からない彼との再会の日を待つ事となっ  
た。

いつも彼は「待たせてばかりでごめんね。帰ったら君の家の近くに  
住まいを見つけるよ」  
と言ってくれていた。

いつになるかもわからないが、いつの日か来るであろうその日のた  
めにシヨッピングの

ついでになんとなく物件探してみたいな事もしていた。

そんなある日メールの返信がない日があった。

「ま、今までも二日位はこんな事あったし明日になれば」とあまり  
気にしていなかった。

彼の居るところは、想像以上に辺鄙らしく夜になれば辺りは真っ暗  
で車がないと生活できないようなところだと聞いていたし、毎日メ  
ールするにも話題に事欠くし。と。

でも翌日も返信がない。

ちょっと不安になり、お父さんに不幸があった時も、何週間も連絡  
が途切れたしまさか

お母さんにまでなにか良くない事があったのかも。

とどんどんイヤな想像が膨らむ。

もし、そうならしばらくはそつとしておいた方がいいしと思いとり  
あえず連絡を待つ事に。

それからどれくらい時間が経ったのか覚えていない。

待ってる時間はいつもの何倍にも感じるし実際はそんなには経って  
いなかったのかも知れない  
。

それにしても、音沙汰がなさすぎる。

彼の身になにか・・・と考えだしたらいてもたってもいられず、思  
い切ってメールしてみた。  
すぐに返信。

「あれ？すぐに来た？なんでもなかったのかな」と思いケータイを開ける。

“その他”のフォルダに“1”とメールの受信を知らせるマークが。なんだ・・・違った。

とそのフォルダを開けてドキン！！と胸が鳴った。

エラー通知。

なんて書いてあるのが良くわからないあの、英文の長い、メールが届かなかった事を知らせるものだった。

「なに・・・」「届かないって？」「これってどういう事・・・」電源オフでもサーバーには届くはず。

エラーって事は、そのメアドが存在しないと言う事か、拒否・・・それならばと電話を掛けたが、コールだけで繋がらない。そんな事を何度か繰り返し返した。

それから頭の中にいろんな想いがめぐり、なにをしたのか良くわからない。

気づけば一人車の中で呆然としていた。

翌日、会社に出勤し彼の事を相談していた友達に昨日の出来事を話す。

「えー？なにそれ？訳わかんない」

と私よりかなり年下の美人の彼女は首をかしげた。

その週の金曜日、その友達と呑みに行き私がどれだけその彼を特別に想っているか、その

彼からの連絡が途絶え苦しい事を話し彼女は「もしかして着拒とかなら別のケータイから

ならかかるんじゃない？」と自分のケータイを貸してくれた。

でも、勇気が出なくて彼女に彼のケータイ番号を伝えかけてもらい

コールしたら渡してくるよう頼んだ。

彼女がケータイを耳にあてる。

しばらくじっと待っている。

・・・と一瞬「えっ？」と言う顔をした。

なにが起きているんだろうと彼女の顔を見つめると彼女はケータイを耳から話し一言

「“現在使われておりません”だつて」とちよつと神妙な面持ちで言った。

まさか、そんな事になつてゐるなんて・・・  
目の前が真っ暗になった。

連絡付く方法なんてないし彼の周りの人の事も誰も知らない。  
どうしよう・・・どうしたらいい？

友達に「自宅・・・行ってみるしかないかな？」

と言うと「そーだよ！もうそれしかないっしょ！」と。

離れて行こうとしている人の自宅になんて行ったら引かれるかも。  
嫌われるかもしれない。

でも、もうそれしかできる事なんてない。

翌週の金曜、思い切つて行ってみる事にした。

友達もたまたまそっちの方面に用事があるとかで、一緒に行ってくれることになった。

雨が激しく降っている日だった。

ほんの数回しか行つた事がないし、駅からの近道とかでかなりクネクネと曲がりながらだし、

しかも夜だったしほとんど覚えていなかった。

途切れ途切れの記憶を頼りに雨の中を歩いた。

手も足もびしょびしょになりながら、途中迷ってしまいたどり着かないかもと諦めかけた

頃、見覚えある道に出た。

「あ！この道わかる！」とそれから真っ直ぐ行って自販機を右に曲がれば彼の

住むアパートがあるはず。

そこには懐かしささえ感じるその建物はあった。

「ここだ・・・」

ホッとしたのもつかの間、表札は別の誰かのものに書き換えられていた。

ご丁寧に色まで塗り変えてある。

これで本当に絶望的。

でも、去るもの追わずの私がここまでしたんだ。もういい・・・。

帰りの電車の中、二人は終始うつむいたままだった。

彼女は用事がある途中の駅で下車し、私は一人泣きたいのをこらえていた。

それが4月の終わりの出来事。

彼に出会って私は忘れていた純粹に人を好きになるキモチを取り戻した。

条件なんかじゃない。

好きならなんだってできる。お金だっただくさん持ってなくていい。車だっただけでいい。

とにかく、付属品なんてなんだっていいんだ。

毎日、仕事と娘の世話を済ませベットに入ると彼を思い出してはため息。

泣けない程に悲しい。

でも理由なく消えるなんてありえない。

絶対になにかある。

絶対に帰ってくる。

お互い感じた事のないないかを感じたんだ。絶対に絶対にまた、逢える。

出逢って半年が過ぎたけど、まだ両手にも満たない程しか一緒に居られなかった。

まだ娘にだって会わせてない。

まだまだ、一緒にやりたい事がたくさんある！

絶対にまた逢える！逢うんだ！

なにもできないけれど、そう想うのが精一杯だったしなぜかわからないけど確信があった。

一緒に居るはずだった夏が来ても、彼を忘れる事はできず毎日、絶対・・・と考えるのがもうクセになっていた。

念じてるみたいでちょっと滑稽で怖いけど。

毎日ベットで考える習慣はついたけど、メールの受信を知らせる音が鳴るとはつとした

時期は過ぎ、全ての生活が彼に出会う前に戻っていた。

会社友達との会話の中にも彼の名前が出る事はなくなっていた。友達も気を使っていたのだろう。

私は、このまま逢えなくても一生忘れられない恋愛をしたんだ。と清々しい気持ちにさえなっていた。

七月。

暑さも本格的になり、セミの声がうるさくなって来た頃。その日は仕事が休みでたまたま従姉妹の家に行っていた。他愛ない話をしているとメールの受信音。

なにも考えず一連の流れで話しを続けながらケータイを開いた。

例の“その他”のフォルダに“1”

確定ボタンを押しメールを開く。

一瞬なんの事が理解できない。

件名に“間違いがありましたらすみません”

「なんだこれ？」

間違いじゃん。と思いながらも本文を読んだ。

“このアドレスは      さんのものでしょうか”と私の苗字が書かれている。

一気に体が震え出し念のためアドレスを確認した。

そのアドレスの一部は彼の使っていた特徴のあるものだった。

思わず椅子から立ち上がり従姉妹に言葉にならない言葉でなにかを伝えた。

従姉妹は「早く返信してあげなよ！」と言う。

信じられない気持ちで「今までなにをしていたのか」「どこにいたのか」「なぜ連絡が取れなくなったのか」聞きたい事はいっぱいあったけど、一言「待ってたよ」と返信するので精一杯だった。

「      ちゃん、探したよー！」と泣いている絵文字付きのメールが来た。

「車上荒らしに合い、ケータイから財布から盗まれた。  
なにもかもわからなくなり、今日、ちゃんに連絡が付くまで何  
ヶ月もかかった。」と。

私のメアドは単純なものではないので初めて会った日にアドレスの  
意味を私から

聞いたのを思い出し、色んな組み合わせをメモに書き出して毎日メ  
ールを送っていた。  
と言う。

エラーで帰って来るのがほとんどで、届いてもそんな不審なメール  
に返信は来なかった  
らしい。

やっぱり彼とは繋がっていたんだ。

諦めなければ叶うんだ・・・と彼を信じて連絡も取れない状態で3  
ヶ月待っていた自分を  
褒めてあげたい気分になった。

その夜2時間電話で話し、他の人を探すのは簡単だと思うけど私は  
どうしてもそうする

事ができなかった。ずっと信じてた。待つしか方法がなかった。と  
今までの思いを伝えた。

彼は車上荒らしでケータイもお金も盗まれ結局、帰ってこれず田舎  
で仕事をしていると言う。

賃金が都内の半分以下でなかなか貯まらず帰れない・・・と。

又、不確かなアドレスに何度もメールしては届かない状態を何ヶ月



も繰り返し、ここまで諦め切れないのはきつとなにかある。と思ったとも言っていた。

切るとすぐに「俺の愛した人に間違いはなかったよ」とハートがいっぱい付いたメールをくれた。

もちろん、友達にもすぐに報告した。

「はーあ？なにそれ？意味わかんない」とすぐにメールが帰って来て、会社で会った時には

「ありえないっしょ！絶対もう連絡ないと思ってたし。」と本音を漏らしていた。

そりゃ、そうだよね・・・。

それから約1ヶ月。

また毎日、朝には「おはよう」昼休みに「午後頑張つて」帰宅し「お疲れ様」と

メールをやりとりする日々となった。

8月末、彼が「そっちに帰るよ」とメールをして来て私達はおよそ8ヶ月振りの再会を果たす事となった。

「きつと逢ったら泣いてしまう」そう思っていたけど涙は出なかった。

一緒に居る事がそれほど普通の事になっていたのかも知れない。

また今年も私の誕生日に一緒に過ごす事ができたけれど、去年は離れていたクリスマス、

今年は子供と3人で遊びに行けるかも。

一旦は切れたと思っていた運命の糸。

こんなに離れても、連絡取れなくなっても繋がっていたのはきつと

奇跡。

だからもう一生切れる事はないと信じて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2764d/>

---

kiseki

2010年11月25日13時46分発行